

2013年クオリア AGORA 第3回

「古人骨・古代の色から見る、日本人とは何か!？」

長谷川和子（京都クオリア研究所）

今回も大きなテーマを掲げさせていただきましたが、古代人の人骨を世界中駆け巡って調べていらっしゃる京都大学名誉教授の片山一道さんと、日本の古代の色を様々な文献から読み取ってレシピを作って復元していらっしゃる染師、染色家の吉岡幸雄さんのお二人をスピーカーとしてお招きいたしました。このグローバル時代、日本人とは、ということが問われている中、日本人の原点を見つめ直してみたらどうかというのが、おふたりにスピーチをしていただくきょうの趣旨です。

今、DNA がまるで万能のように思われたりしているのですが、実は、人間に関しては、まだ、DNA で分かることは限られていて、人の目、目視であったり、アナログ的な要素に頼らなければいけないことがたくさんあります。また、染の世界では、欧州から化学染料が入ってくる前の日本の色の美しさはどんなもので、日本人は色を通じて何を表現しようと思っていたのか、この辺も興味深いところです。

きょうは、まさに京都ならではの、形式値と暗黙知の行き交う場になるのではないかと思います。それでは、まず、片山さんからお願いいたします。

「身体史観でたどる日本人の原像」

片山 一道（京都大学名誉教授）

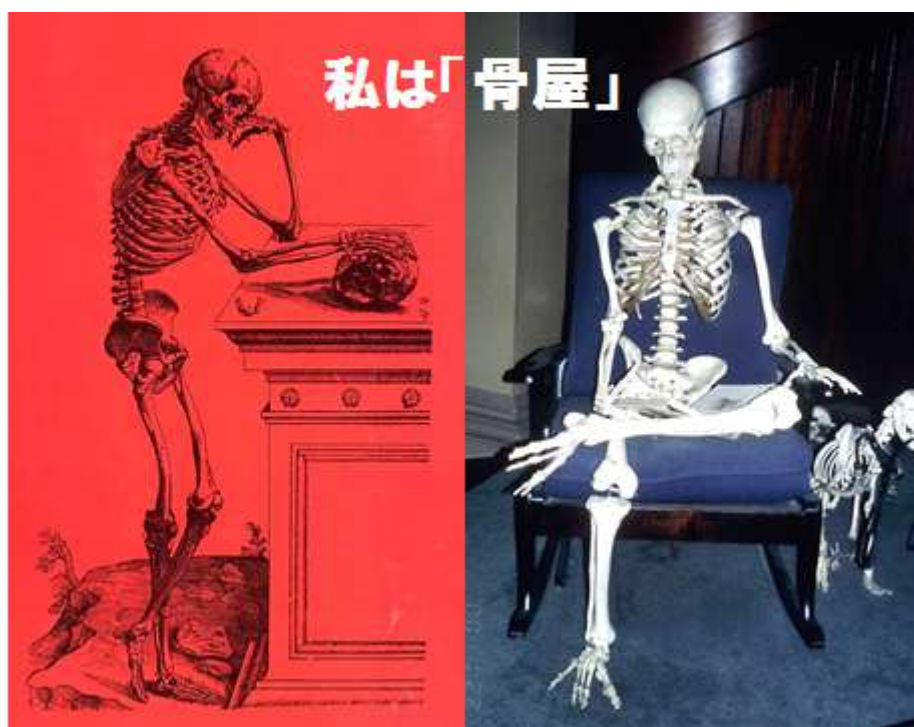


「日本人論」、あるいは「日本人とは何ぞや」というテーマで、私なりに手短かに話してみたいと思います。もとより雲をつかむような芒洋とした話ですから、時間内にまとまるのか、自信はありません。

今思い出しましたが、20年以上前、キャンベラにあるオーストラリア国立大学で、日本学（ジャパノロジー）の国際シンポジウムが開かれたときのことです。メルボルン大学の社会学の先生が「日本人とは、『日本人論』が大好きな人たちのことである」と冗談めいた話をしておりました。なるほどなあ、うまいこと言うなあ、と感激して聞いた覚えがあり、今でも強くインプットされています。それに比べると、私の話はどうか。みなさんの興味をひくようなものになるかどうか、いささか心配です。配布物には、いっぱい書きこんでおりますが、みんな話すわけではありません。後のワールドカフェのときにでも話題にしていただければ、幸いです。

はじめは、私たちの稼業である「骨屋^{ほねや}」についてです。「古人骨」、つまりは、考古学の遺跡で発掘される人骨を多角的に研究するのです。われわれは一度むけば「骨格」ですが、

私ども「骨屋」という存在は、この写真（資料）のようなものです。人骨が読書しています。古い人骨を見えています。私よりは、ちょっと足が長そうですが、これぞ、「骨屋」が骨を埋める姿なのです。



つぎに、なぜ古人骨を研究するのか。これは、考古学の遺跡から出てきた人骨から、いったい何がわかるのか、と関係します。

資料①は、考古学の遺跡から出た人骨を調べることで明らかにしうる事項を並べたものです。とにかく、骨を残した人間の人物像や生活像について、いろんなことがわかります。もちろん、どの人骨も良好な状態で残るわけではありません。だから、残り方によって、よくわかる場合とわからない場合はある。等身大の人物像、生きかたや死にざま、などなどが、くわしくわかることも希ではありません。古人骨を研究しなければならない理由です。古代人、あるいは江戸時代の頃の人についてもそうですが、彼らの等身大の実像を探るには、骨しかないのです。肖像画や壁画があるじゃないかとおっしゃる方もいますが、実は、あんなもの役に立ちません。あとで再びふれます。資料①に挙げる26項目ほどのことがわかったら、当時の人間の实像が浮かび上がるのは当然です。それから資料②。新聞やテレビの報道も、このことについて、ある程度のリテラシーが望まれますが、困った例もあります。この新聞記事が、その例です。古人骨研究に理解を示さない頑迷な某考古学者の言い分を垂れ流しており、記事を見て、髪の毛が逆立つような思いがしました。テレビでも、たとえばニュース番組などで、人骨が話題になると、わけ知る顔の解説者が「DNAを調べたらすぐわかりますね」などと気楽にやる。たつぷりと眉に唾を付けてください。たしかに新しい骨なら、多くのことがDNAで分かるでしょう。でも、考古学の遺跡から出てくる人骨については、資料①で挙げる項目のうち、血液型とか性別とか除けば、たとえDNA配列が詳しくわかって、なにも解読できないのです。

骨屋でも、生身の人間の骨格を透視するのは難しい。X線装置のようにはいきません。でも逆に骨からは、生身の人間の顔立ちや体形が容易に翻訳できます。この頭骨の主は生前、

考古遺跡で発掘された人骨と、
3D立体ジグソーパズル
(今はコンピュータ上で
仮想的に復元できる)



発掘時の状態



復元頭骨

鼻が大きかったか、おちよぼ口であったか、などは推測できます。ところが、実際に遺跡で見つかるときは、バラバラに壊れた状態ですから、まずは、頭骨などを復元しなければ

なりません (資料)。この作業は楽しいものです。三次元の立体ジグソーパズルのようなものです。やり始めたらやめられない。やり慣れた骨屋なら1日で一人分くらいできます。最近では、コンピューターの中で仮想的に接合することもできるから、より難しいことが可能になりましたが、面白みが半減したように思います。

さて、タイトルにある「身体史観」ですが、これは私の造語です。どういうことか。われわれの「^{からだ}身体」もまた実は、文化や社会と同じように「歴史的産物」なのです。ひとり一人の人間が、何千年、あるいは何万年の歴史を背負って生まれ、生き、歩んでゆくわけです。どの時代の人間も歴史的必然なのです。だから、その時代その時代の人間の等身大の身体形がわかれば、そこから一つの歴史学を構築できるのではないかという発想です。その発想で、日本人の歴史を見てやろうということで、久しぶりに最近、拙著(7月22日刊「骨考古学と身体史観—古人骨から探る日本列島の人々の歴史」)を刊行しました。ここからは、その本をネタにして話を進めていきます。

順次、時代ごとに、日本の歴史をになった人々のことに触れていきます。まずは旧石器時代人。日本列島には中期旧石器時代の7万年ぐらい前から人間が住んでいただろう、との見方が今や有力です。10万年ぐらい前にさかのぼる遺跡を見つけたと主張する考古学者もいますが、悩ましいところです。ようわかりません。ともかく、7万年ないし6万年前ぐらい前から1万5千年~1万3千年ぐらい前にいた人たちが旧石器時代人です。そのころは概ね氷河期、今の日本とは地形が違います。氷河期には、地球が寒冷化、氷河が広がるから海水が減少、海面が下がるわけです。そうしたら日本は、列島ではなくなる。今の大陸棚までもが陸地化していたために、日本列島ではなくて、本州半島で朝鮮半島と陸続き、

北海道半島がサハリンの方から北海道まで伸びていた。そして、沖縄半島が、完全に半島化しないものの、台湾の方から伸びていた。日本の旧石器時代人は、そういうところを陸伝いに移動してきたみたいです。おそらくは東アジアの西の方から、あるいは北の方から、吹きだまりのように来て住み着いた人々だろうということです。

それでは、いったい、どういう人たちだったのか。本州地域では、残念ながら、彼らの身体を復原できるほどに良い化石人骨が見つかっておりません。でも沖縄諸島では、いくつか見つかっております。その代表例が「港川人」(資料)です。涙が出るほどに良好な人骨が含まれています。全部で9人分ほど見つかっており、うまいことに、1号人骨は成年男性骨、4号人骨は成年女性骨です。この写真は1号人骨に基づき復顔した男性の肖像です。



この港川人のような人々が、つぎの縄文時代人の祖先となったのでしょうか。これについては、最近では、否定的な見方が有力です。港川人骨を研究した鈴木尚先生(東京大学)

は1963年に、縄文人の骨に似ていることを指摘しました。ところが、最近のいくつかの研究は、沖縄の港川人は本州の旧石器時代人と流れを異にし、縄文人につながらない、と推論しています。当時、東南アジアにいた人たちが台湾方面から一時的に広がっていたのだろう、とのことです。そんなわけで、たとえば柳田國男の「海上の道」との連想で常識化してきた「縄文人南方起源説」に懐疑の目が向けられるようになりました。つまり、かならずしも縄文人は東南アジアにルーツをもつわけではなさそうです。ともかく、港川人と縄文時代人とはつながらない。琉球諸島と九州の間にある海域は荒れ狂う海。1万年以上も前のことですから、たやすくは渡れず、こえがたい障壁となったかもしれません。そうなると、埴原和郎先生(国際日本文化研究所)の「日本人二重構造論」仮説は雲行きが怪しくなります。なぜかという、この仮説は、縄文人が東南アジアに起源したことを前提にしているからなのです。

ところで御年配の方、40代、50代、60代の人などは、「明石原人」という言葉を御存知だと思います。それから「高森原人」、あるいは「東北原人」という言葉も御存じかも。かつて、前者は1985年ぐらいまで、後者は2001年ぐらいまで、高校の日本史の教科書に出ていました。今から何十万年もの昔、つまり中国大陸に「北京原人」がいたころ、すでに日本列島にも人類がいたのだらうという話です。今では、どうもおかしいということで、教科書から消えてしまいました。ことに後者のほうは、「遺跡の捏造」が関わる話ですので、えらいことになったわけですね。いずれにせよ、日本列島には7万年ないし6万年ぐらい前から人間が住み始めた。東アジアの方から、ふきだまりのように集まってきたのだらう、というのが定説のようになりつつあります。

次に登場するのが縄文人です。今から1万5千年ないし1万3千年ぐらい前から2千5百年ほど前の縄文時代にいた人々のことです。愛知県の伊川津遺跡から出てきた縄文人骨の写真（写真）と、それをもとに作成した復元像です（写真）。どうです、格好いいでしょ

縄文人 日本列島で誕生した 一種独特の身体特徴の 固有な人々



縄文時代の狩獵者像



う。連れて
いる犬も可
愛い。今の
日本人とは
かなり身体
が違います。
どう違うか。
なんとも寸
詰まり体形
ですし、顔
立ちも違い
ます。大顔
で、鼻の骨
がやたら大
きい。それ
に顎の骨は

エラが張っています。鼻骨と顎骨の法則というのがあり、すぐに縄文人だと見わけられます。それに歯が変でしょう。わざわざ何本かを抜いています。抜歯です。それに、上の前歯（切歯）を研いでいます。縄文時代の後期の頃には、全国的ではないのですが、こういうことをする風習が広くありました。根もとの大きな犬歯を抜くのは、今の歯医者さんも大変なのです。抜歯や研歯を施す身体加工風習は、お洒落のためではなく、おそらくは通過儀礼として、あるいはシンボリックな意味合いで、はたまた身分証明書のような意味で行われたようです。

縄文人は、縄文時代の長さの割に、非常に均質な人たちと言えます。もちろん、すこし

は時期差がありますが、それほど変化しなかった。地域によってもそんなには違わない。おそらく、日本列島の各地にいた旧石器時代人が融合するようにして誕生した人々だろうと思います。採集狩猟が生活の中心だったでしょうが、ところにより、園芸農耕活動も盛んであった。それと、非常に漁撈活動が活発で「海の民」的な性格も強かった。日本が列島化したことと関係するのでしょうか、豊富な海産資源を積極的に利用していたようです。おそらくは世界でも一番古いか、二番目かに古い海の民です。園芸や漁撈活動のために定住生活が基本であり、大きな集落もあった。そのためもあるが、独特の土器文化が育まれた。豊穡な時代かどうか、それはともかく、「静の時代」だった。つい最近、建築家の上田篤先生は「縄文時代には、持続可能な社会のモデルがあった」などと、えらい賛辞をおくっておられます。そやろうか、と考えてみたのですが、たぶんそんなことはなかった。というのは、縄文人は日本列島全体でも20万人程度の人口規模だったようです。せいぜい「食い、寝て、出す」だけの日々を送っていたのでしょう。尊敬すべき祖先ではありますが、現代人とは違いすぎるユニークな人たちだったようです。

次は弥生時代の人々です。いっぱい渡来人が朝鮮半島から来て、それまでの縄文人に取って変わったのだらうと、常識のように言われたりしますが、そんなことはなかったようです。日本列島の人口は、この時代になると、100万人～200万人規模に増大するのですが、渡来人が雲霞のように押し寄せたからではない。別の理由があったようです。

私のレジュメには、弥生人にカギ括弧を付けています。弥生時代の人々は多様性が強く、地域性がめざましいから、ひとくくりにできないのです。そもそも地域により、人口密度が違っていただけではないのに、この時代の遺跡で発掘された人骨の量には非常に大きなバラツキがあります。これまで出た人骨の90%以上は、福岡平野を中心にした北部九州と山口県西部の遺跡からです。そしてその大半は、いわゆる渡来系弥生人の骨です。渡来人につながる人々のものなのでしょう。しかしながら、それ以外のところ、たとえば西北九州や近畿地方では様子が異なります。前者は、まるで縄文人の骨です。近畿地方では、よく研究できる人骨は30体分ほどしか見つかっておりませんが、それでも一筋縄ではいきません。いろんなタイプの人があったことが判っています。縄文人のような人、渡来人系の人、これらがミックスしたような人、さらには古墳時代人のような人までいて、まさに「弥生人さまざま」なのです。なぜこんな現象が生じたか。ひとつには、社会構造や社会様式などが変化、多様化したこと。ひとつには、弥生時代になって、対馬海峡と朝鮮海峡を舞台に人間と文化の行き来する道、回廊地帯ができ、イギリス海峡のような状況が生まれたことです。つまり、人間とともに、新しい外来の文化や生活様式が入ってきたことが、日本列島の人々や社会を複雑にしたのです。でも縄文人が、新たな渡来人に入れ替わったわけでも、縄文人と渡来人とがサンドウィッチのようになったわけでもない。中世の頃まで続く回廊地帯が生まれ、大陸とのつながりが強くなったということでしょう。神戸の「新方遺跡」の人骨などを見るかぎり、依然として、「縄文人もどき」が広く分布していたことを物語っています。

弥生時代は「争乱の時代」でもあり、西日本を中心に、かなり国が乱れたようです。この時代の遺跡からは、殺傷痕（死亡時にできた傷）をもつ人骨、あるいは、矢尻や刃物の破片が刺さった人骨なんかが見つかります。ともかく、傷つき倒れた人たちの骨がいっぱいいたのです。赤い色をした骨も見つかりますが、不気味さが漂いますが、事件性とは関係ありません。たぶん死者を埋葬するときに水銀朱をバラマキ、それが骨に染みこんだのです。

時間がないので、古墳時代人については、藤ノ木古墳の石棺をお見せするにとどめます（資料）。奈良県辺りの大型古墳に埋葬された人たちは、一風変わった人たちだったよう



す。ともかく背が高い。高松塚、藤ノ木、マルコ山などの古墳の被葬者は、みんな背が高い。当時の人々の

平均身長は、全国レベルでは 160 ㌢くらいですが、そうした古墳の被葬者は、高槻の阿武山古墳の藤原釜足なども含めて、166～167 ㌢くらいあったようです。おそらくは、階層性が顕在化したためでしょうが、国家形成のプロセスで社会構造が複雑化、身分が分化したのでしょうか。ところで、藤ノ木古墳の二人の被葬者は、権謀術数が渦巻く時代の犠牲者であった可能性が指摘されております。

ちなみに、中世から近世にかけて、なぜか日本人の身長は低くなっていきます。どうして低くなったか、興味が尽きません。ある人は、食物が悪くなり、栄養状態が悪くなったためだろうと想定しますが、どうも、そんな単純な問題ではないようです。私の師である池田次郎先生は、通婚圏が狭まって、近親婚の割合が高くなったせいではないか、と考えておられましたが、どうも、こちらのほうに説得力がありそうに思います。

京都との関係で、江戸時代の人骨にも触れておきます（資料）。伏見城遺跡で発掘されたものです。伏見区役所の拡張工事の際、大規模な発掘調査が行われたのですが、そこに、



江戸時代の寺の古墓地がり、なんと630人分もの人骨が出土しました。ありがたい貴重な資料です。おかげで江戸時代の京町民の実像を描くことができます。ともかく背が低い。寸

詰まりの丸顔の人が多く、それに口が出て、おちょぼ口が多い。なかには長い顔をした貴族顔の人もありました。現代人と違い、才槌頭が普通であり、絶壁頭はほとんどいない。平均身長は低いが、当時の日本人としては普通。大顔で小足、胴長短脚、下肢が短いのですが、これも当時としては相場。戦前ぐらいまでの日本人を少しオーバーにしたぐらいです。こうした当時の京町民の身体像が浮かび上がってきました。

江戸時代の京都は、すでに都市化が随分と進んでいたのでしょう。梅毒などの流行病に罹った痕跡を残す人骨が少なからず見つかりました。それから、当時の京町民の出生時平均余命、つまり「寿命」は、40歳近くと推定できました。「人生40年」ですが、みんな40歳あたりで死んだわけではない。乳幼時や未成年で死ぬ人が多かったので、40歳程度と低く計算されるだけの話です。長生きする人は80歳とか、それ以上も生き、長寿をまっとうしていました。それと今は、女性の方が長生きする傾向にありますが、江戸時代の人を見るかぎりでは、男性の方が長生きする傾向にあったようです。このことについては、伏見人骨が特例なのかどうか、もう少し詳しく調べる必要があります。

余談ですが、ひとつ日本史の教科書に注文を付けておきます。こういう絵を教科書に載せるのは、なにか抵抗をいただきます(資料)。織田信長にも聖徳太子にも会ったことはいないですから、つましい言いかたをしますが、どちらの肖像画も写実的ではないでしょう。後者は頭でっかち、足が小さすぎます。顔をアップしますと、耳の位置が高すぎます。これでは、メガネはかけられません。こんな人間はいない。虚構です。また前者は鼻が大きすぎます。私の知るかぎり、バルカン半島の人是一般に大鼻ですが、それでも顔の6分の1程度の大きさ。それに口が小さすぎる。こちらも、とても人間の顔とは思えません。こん

なのが、美術や芸術の教科書ではなくて、日本史の教科書に出ているわけです。こんなフィクションを、ノンフィクションであるべき歴史学に登場させてはいけないのではないかな。もっとリアルなもの教科書に登場させてもらいたい。たとえば、弥生時代の女性像(資料)。奈良の長寺遺跡で出土した人骨から復顔したものです。こちらは、滋賀県の打下古墳の男性骨から復顔した古墳時代人の肖像です(資料)。こういう復顔像は、今なら簡単にできます。CT スキャンと3D プリンターで骨のコピーを作り、軟部組織を張り付けるわけです。もちろん古代人でも多少は個人差があったでしょうが、筋肉や脂肪や皮膚の厚さは、現代人ほどではなかったはずですよ。こうした現実的に人間の顔立ちや体形をもつ人物を登場させるほうが、日本人の歴史を忠実にたどれそうです。これぞ、私が申すところの「身体史観」なのです。

最後に、まとめです。縄文時代から現代まで5千年ほどの間に、日本人の身体は、時代とともに随分、変化してきました。

「日本人の原像とはなにか」、これが今日の話のテーマですが、実際に日本人は非常に複合的な人々です。そもそも旧石器時代の頃からそうであった。たとえば「日本人二重構造論」、そんなモデルで語れるほどに単純なものではありません。ともかく、東アジアの「行き止まり」のような日本列島で「ふきだまり」のように混合を重ねてきた。もうひとつのポイントは、縄文時代の列島風土で適応的に誕生した縄文人を基盤とすることです。その時日本人が生まれたと考えてよい。その後、弥生時代から中世にかけて、海峡時代を迎えた。つまり朝鮮海峡と対馬海峡とが人間の混合化と多様化に果たした役割は大きいようです。

ともかく日本人の身体特徴は、時代とともに変化しました。鴨川の流れは同じならず、まるで油絵具をかき混ぜるがごとく変化しました。おそらくは古墳時代と明治以降とが、日本人の歴史において二つのエポックとなったであろう、と申し上げて、スピーチを終わります。ご静聴ありがとうございました。

☆ 「日本の色を探る」



吉岡 幸雄(染師 染色史家 「染司よしおか」五代目当主)

私どもは、簡単に言いますと染め屋なんです。京都は、古い時代から染色の仕事が発達しておりましたし、染色に携わる人は昔からたくさんいました。大体、権力者ができて、国が興隆していくと、非常に色を欲するわけで、これは日本ばかりではありません。先ほどのお話の中で、シルクロードのパルミラ遺跡の写真が出てきましたが、私も現地へ行って

発掘されたものを見させていただき、多分、2千年ほど前のものなんでしょうが、大変華やかな染織品が残っておりまして、それも、そこでできたものばかりでなく、はるか中国から来たものもあったんですね。日本でも、大体2千年ぐらい前から、色彩のある服を着るという文化ができ上がっていったと考えられると思います。もともと、縄文とか弥生の初めのころまでは、衣服を着たり、着るものを作ったりしていたとしても、それはどちらかというと保温や身を守るための



もので、おしゃれとか色を楽しみ、豪華にするというような考えはなかったと思うんですね。国家というものができてまいりまして、例えば、卑弥呼のような女王がいて、その下に誰々、何々、更に庶民と、階級というものができあがってくると、色に対する概念というか、そういうものが非常に強くなっていったということではないだろうかと考えています。

まあ、私のような一介の染屋が、なんでこういう古いことを勉強しているかということになるわけなんですけども、染織の仕事も世界のターニングポイントは、やはり「産業革命」なんですね。われわれ、染色のことで申しますと、非常に簡単なんですけど、1850年代ぐらいに、それまでは、そこそこの文明の高い国家を形成している国々ではどこでも、ここに持ってまいりました植物のどっかの部分、つまり、花、根っこ、実、皮だとかから色をとって、それで染めて華やかな衣装にして、おしゃれをしたんです。ところが、イギリスとかドイツで石炭、コールタールなどから色を人工的に作るということが発明されてからは、これが急速に普及しました。日本でも、明治初年になりますと、これが入ってきました、なんとといっても化学合成で随分簡便でありますから、それまでの自然のものをもって染色するというのは、面倒くさい、辛気臭い仕事でありまして、特に20年代、30年代から、化学合成のものにとって変わられ、旧来の染め方はどんどん廃れていった。

私どもの家は、二百数十年も染色の仕事をしておりまして、私で五代目なんですけど、初代と二代目っていうのは、江戸時代で、植物染料しかなかったし、当然ずっとやっておったんです。そのころ、四条の堀川あたりは、同じような染屋がいっぱい並んでいたんですね。ところが、明治10年ぐらいになって、例えば、ドイツやスイス系のチバガイギーとかバイエルあたりが、便利な化学染料を盛んに売りに来たんですね。これに三代目が飛びついた。とにかくよそとの競争に勝たないけませんから、人がしないことを早くせんとダメなわけで、高い染料を贅沢に買い、染色を始めたんです。こうやって、わが家も化学的な染めに変わっていきました。こうして、明治時代の中頃から大正時代は、日本人も大変カラフルなものを着るようになり、庶民も、それまでの大概が紺の綿のものの一辺倒だったものから、だんだん華やかなものへと風俗が変わってまいりました。それで、染屋も活気づいて、いい生活をしていたようです。

ところが、私の父の代になって、第二次大戦後なんです、「化学染料だけでは良くないんじゃないか」と思い始めるんです。それは、何がきっかけかといいますと、正倉院の一般公開だったのです。昭和24年あたりから、正倉院の宝物を一般の人に見せるようになった。それまでは、特定の人にしか見せなかったんですね。それを見ると、1200~1300年前の宝物は、1000年以上経っているとは思えない、非常にきれいな色が残っていた。父は、これにショックを受けた。最初は、自然染料だったのが、明治以降、化学染料となった。これ、もう一度、きつけれど元のやりかたに戻ったらどうか。そのほうが、われわれ日本人の色彩観を理解する上でもいいことではないか。ということで、古典というか、古い技法に戻って行ったんです。

私は、学生時代から、染屋を継ぐという気持ちは全くありませんでした。興味もなかったんですね。そんなふうにかがやがや家業がいいもののだとは少しも思わなかったのが、長男ですが逃げておりました。それが、40代になって、家業を誰も継ぐ者がいないということで、長くやってきた商売でもあり、どうしてもということになり、家に戻ってまいりました。学生時代と勤めてからも東京で生活しておりましたが、京都で育った環境から比べると、公害問題というか街が汚く、



例えば隅田川の臭いなんかも、鴨川や宇治川と比べたら耐えられない。そのように東京の生活で、公害とか科学や化学がもたらした弊害というものに感じ入るところがありましたので、私は、戻ってからは、一切そういう化学的なものはやめることにしました。それで、父が研究しておりましたことを基に、できるだけ、日本人が弥生時代、2千年くらい前から作ってきた色彩の文化といいますか、そういう事実をもう一回勉強し直してですね、古いものに戻ろうというか、古い技法を踏襲しようということにしたわけです。と申しますのは、(写真) ここにも持ってきていますが、植物染料で染めたものの方が、色が非常に美しい。それから、色の深さって言いますか、色が浸透する力が違う。それと、植物から作っている安全性、環境に優しいというような事がございまして、それに徹するようにしたのでですね。

この造花をご覧ください。(写真) 椿の造花なんです、赤と白と真ん中が黄色。これは、50年近く、東大寺の方からご用命を受けているものです。手漉きの和紙を、私どもが、紅花で赤に、^{くちなし} 梔で黄色く染めたものです。東大寺で造花はお作りになるのですけれど、ここに穴があいておまして、本物の椿の木に差し、本当の椿の花が咲いているようにされ、「御水取り」の時に使われます。3月1日から14日間、松明が上がると同時に選ばれた僧が十一面観音にお祈りされる時、飾られるのです。これが、なぜ、紙の造花になったのか、いつごろ、どうして始まったかという、記録はないのですが、私が調べたところでは、大仏開眼の時には、「種々造花を献ず」ということが「続日本記」に書かれていて、この時にはもう造花があることがわかります。後々、調べますと、シルクロードの遺跡を調査した

オーレル・スタインが大英博物館に持ち帰ったものの中にも、造花がございまして、新疆でも発掘されており、相当古い時代から造花というものがあつたことがわかってまいりました。東大寺、薬師寺、京都では八幡の石清水八幡宮—ここの放生会という平安時代からの行事—でも、造花が使われております。こういう世界的、歴史的な仕事を、私どもは担っておるのです。古典的、非常に長く続いてきた行事には、やはり、そういう古典的な技法で飾っていただきたい、花を作っていただきたいとの思いで、造花になる紙を毎年染めて納めています。今年で 1262 回を数える御水取りですが、1000 年以上きょうまで休まず続いている伝統の行事です。毎年、この継続する仕事を十分に遂げたいという思いで、植物染めの色彩の美しさを強調するように頑張っております。



それで、私は家に戻りましてから、できるだけ日本の古い時代の染屋さんとか、私ところの家系だけではなくて、多くの古い時代の染屋っていうものがどういう技術をやっていたのかを知ることが大事だと思いました。そして、それを探求することが、自分たちの一番の教科書であろうというふうに考えまして、様々にやってみりました。

日本の国の特徴は、発掘ということがひとつあります。それにもう一つ、正倉院とか法隆寺の蔵で見つかるものを加えてみますと、大変たくさん染織品が残っておる事なんです。つまり、日本は、例えば奈良時代の染めは、これだけの色があつた。こういう技法があつたということが理解できる国なんです。さらに、「正倉院文書」などの記録というものを紐解いてみますと、その中には、どのような染料を使っていたのか、それはどこから運んできていたか、どんな技法でやっていたか、というようなことがかなり書いてある。もちろん、それは、今日の料理の本のように細かく詳しく書いてあるわけではありません。が、材料とかのことが書いてありますと、毎日、植物染料と接しておりますわれわれには、これがどのような技法で、どのように使っているかということが、読めてくる。行間が読めるわけなんです。こういうことを大事にしながら、仕事をしています。

それから、「源氏物語」とか「万葉集」「古今集」など、古典文学を読んでまいりまして、どのような色をどのように染めていたのか、ということがわかってきます。例えば、「万葉集」で「紫は灰さすものぞ」と。これは、つまり「紫」で染める時には、灰がいるということが書いてある。文学を紐解くと、どんどん面白いことになってくる。「源氏」の中で「この人は紅梅の衣を着ておる」というようなことが書いてある。紅梅は真っ赤な梅のことではありますが、紅梅の花を使って染めたわけではないんです。みなさんは、植物染めとか草木染めと申しますと、その花が咲いている通りに色が移るとか、緑の葉っぱがたくさんあるから、緑の葉っぱの色がそのまま移るだろうと思われるかもしれませんが、それは子どもの遊びとしての花摺り、草摺りの技術のレベルです。ある種の文明ができ上がってからの植物染めは、はるかにレベルの高いものでありまして、水のヌルヌルしているから

酸性、アルカリ性を判定したり、あるいは、舐めてみて酸性だなど、経験や勘で、堀場さんところの PH メーターのような判断ができます。また、アルカリでは灰を使いますが、灰でも椿の灰、藁灰、櫟くぬぎの灰といろいろ使い分けなければならないんです。こうしたことが、何回も失敗を重ねてわかってくるんですね。

さっき、紅梅色といいましたが、これは、梅の花で染めるのではなく、「紅花」とか「蘇芳すおう」とかという赤の染料で、非常に濃く染めて紅梅の花のような色を出すのです。

ほかに、「蘇芳かきねの襲」というような言葉が出てまいります。蘇芳は、日本では生育せず、熱帯地方だけでしか育たない染料なのです。ところが、正倉院の蔵の中には、蘇芳染めの木製品が残っています。それは黒柿の木で作ってあるんですが、「蘇芳で染める」ということが書いてある。ということは、日本人は、8世紀には、蘇芳という染料を南方から輸入して染めておった、ということがわかってくる。それだけではなくて、正倉院に残っておる薬物の中にも、蘇芳の木の材料があります。また、鑑真和上の渡航記「唐大和上東征伝」を読みますと、中国のところで、蘇芳がうずたかく積まれていて、これを売ったらすごく高く売れるということが書いてある。こうしたことから、日本人は、国際的な材料も早くから知っていて、買ってきて自分たちの色として使っていたということがわかってきます。また、「苧安かりやす」という芒のような植物がございますが、正倉院文書には、「苧安紙」という苧安で染めた紙のことが書いてあります。その刈安は「延喜式」では、近江と丹波の国から納められると書かれていて、また「紫」は、大分県の阿蘇山の麓から入ってくると書いてあります。その場所には、太宰府から役人が行って、税金の取立てのために生育を監視しているということも書いてある。

このように、いろいろ調べたことで、古代から江戸時代まで、化学染料が入ってくる以前の日本人が、どのような色を染めてどのようにおしゃれをしてきたのか、というような、材料的なこと、色彩感覚がなんとなく読めるようになってまいりました。これで、最初、面白くないと思っていた家業の染めが、極めて面白くなってきました。家を継いで30年近く歳月が経ちましたが、今は、大変、こういう仕事に喜びを感じております。



このようにいろいろ感じる中で、今、われわれ、中国と仲が良くないようなんでありますが、(写真)ここに繭を持ってまいりまして、白い絹糸もございます。これ、ご存知のように桑で育てたお蚕さんが吐いて作った繭からこういう糸にしております。この養蚕、絹糸が発明されたのは、3千年前、4千年前の中国と言われておりますが、絹糸は、紅花なんかで真っ赤な色にきれいに染まるんです。これ絹糸だからです。木綿とか麻では全然きれいに染まらない。



紫なんかもそうで、絹糸と植物染めの相性は、非常に優れたものがあります。これは、世界のミュージアムに残っている染織、例えば、エジプトの古代の布、あるいはヨーロッパの中世のタペストリーが残っておりますが、それらは、とても絹と植物染めの鮮烈さというものには勝てない。こんなに鮮やかに染まる絹糸はすごいもので、だからこそ、絹を知らなかった西域の遊牧系の人々が、絹を求めて馬を駆って中国に交流を求めた。そのシルクロードができた大きな理由は、文字通り、中国で発明された絹を求めての道だったわけですが、絹はそれほど優れたもので、またその染の鮮やかさもすばらしかったんですね。

面白いことに、中国の人は、西の方にはその技法について、大変防衛的に対応しているのですが、朝鮮半島と日本には、絹のことをいとも簡単に教えてくれております。例えば、日本では、2千年ぐらい前から、その技法は固まっておったと言われております。「魏志倭人伝」にも「きんそうしゅうせき蚕桑緝績し絹を産する」ということが書いてあり、また、赤や青の錦を、中国に朝献する人に持って行かせたということも記載されています。これを裏付けるように、奈良県の纏向遺跡では、紅花の花粉がいっぱい出ております。この紅花は、私どもも、毎年、東大寺に納めるために100キロ近い紅花を使って仕事をするんですけども、水で洗ってまいりますと、排水路のところにたくさん花粉が溜まっていきます。つまり、そのころ、纏向遺跡のところには、われわれのような染屋か、あるいは、紅花は、口紅やほほ紅の素でもありますので、化粧品を作る工房があったのではないかと、思うぐらいたくさんの量の花粉が出ております。それまでは、明日香村の酒船石のそばだとか、藤ノ木古墳のそばなんかには花粉が出ておって、それは大体5～6世紀のものでした。纏向で花粉が発見された地層は、2世紀から3世紀で、魏志倭人伝のころに絹を織り、赤の錦に染めていたということも大いにリアリティーがあります。加えて、紅花は、エチオピアが原産地であり、逆に、シルクロードを東へ東へと来た植物で、これは輸入するものではなく、栽培しながら普及させていったことがわかっておりまして、そう意味では、紅花や蘇芳など赤に対する執着、これは日本だけではなく世界的に、赤とそして紫に対する執着度が高かったんだと感じられます。

日本の特徴としては、飛鳥から奈良時代にかけて律令国家ができて、たくさんの染屋の職人たちが集められ、国家を形成する位の高い人たちに、華やかなものを着せようという文化が発達し、それが平安時代に京都に移ります。そして、江戸時代の終わるまでは、京都の堀川を中心とした染織の文化一糸を染める、染めた糸を西陣で織る—そういう文化が、少なくとも明治の10年ぐらいまでは、植物染めで行われてきて、日本人の伝統的な色というものを育んできたと言えるのではないかと思います。ところが、先程も言いましたように明治の初めから、化学染料になりまして、今では、みなさんがお召になっている衣料は、99%が化学染料で染めたものになっています。

これは、致し方ないことでしょう。しかし、われわれのところは、この1%の部類のところにいるんですが、日本人が育んできた衣料の文化をなくさないためにも、できるだけ古法にのってやろうと思っております。たくさんの田んぼから藁灰をいただいたり、椿の

木を育ててもらったり、いろいろな協力をいただき、いろんな工夫をして、まあ、続けておるわけです。幸い、日本は、ドイツやイギリスなど西欧のように、全て植物染めがなくなったというわけではなく、ほそぼそとでも途切れず続いていた。記録というものが残っておるという意味でも、日本は優れた国だと思います。それと、布とか着たものを大事に残すという文化がございまして、例えば 400 年前の秀吉や信長の衣装とかです。また、私は、祇園祭の山鉾装飾品等の審議委員もしておるのですが、祇園祭で残されているものは、例えば胴懸は日本で作ったものもありますが、南蛮船でやってきたものを買って、自分たちの鉾にかけたんですね。この発想で今でも続く祇園祭が、染めや織りの職人に刺激を与えたのではないか。祇園祭は、ただ大きなものが動くだけではない。そういう数百年前の国際的な美術工芸品、染織品が、それぞれの鉾町に今もなお守られているんです。こういうことを知って、もう一度自然から得られる色に興味を持ち、日本人の色彩観を理解していただきたいと思います。

それから、日本の色とか日本人の特徴というのと、とかく「わび」とか「さび」とかになりがちなんですが、そういう発想は全く間違っていると思っています。日本でもどこの国でも、透明感のあるすばらしい色をつくるということに大変努力してきたというのが、根本的な考え方でありまして、わびとかさびというのは、そういうものが時を経て色が退色していったもの。あるいは、精神的な、都で活躍した西行のような武士が流浪の旅に出る、芭蕉もそうですが、そういう「わびさび」の精神は、確かに日本にはありますが、実は、もう一方で、昔から美しい色があったり、「源氏物語」や「古今集」のように華麗な色彩を歌い上げるものがあったからこそ、わびとかさびが成り立ったんだらうと思っています。「日本の文化は枯淡の味である」というようなことを言われると、私は、「それは問題にならないぐらい不勉強です」というふうに申し上げたいと思っています。

まあ、一介の染屋であります。こういうものを少しでも残していきたいと思って仕事を続けておりますが、今、深刻な問題が起こっています。例えば、紙を漉く技術でありますとか蚕を飼う文化というか仕事が、毎年、雪崩のように急速に減っておるのです。染屋は染料も技術も持っているのですが、いよいよ、染める対象がなくなりつつあるということになっておりまして、悩ましいことです。ぜひ、心ある方々に、伝統的な技術に対するご理解、ご協力をお願いするものです。

第3回2013年クオリア AGORA 「古人骨・古代の色から見る、日本人とは何か!？」

☆ディスカッション

▽ディスカッサント

堀場 雅夫 (堀場製作所最高顧問)

高田 公理 (佛教大学社会学部教授)

山極 寿一 (京都大学大学院理学研究科教授)

片山 一道 (京都大学名誉教授)

吉岡 幸雄 (染師 染色史家 「染司よしおか」 五代目当主)

山極 寿一 (京都大学大学院理学研究科教授)

では、スピーカーのお二方を交えて、これから討論に入っていきます。第一に、私の感想ですが、きょうのテーマは「クオリア AGORA」にぴったりのものだと思います。ご存知と思いますが、クオリアというのは、「自然の感触を感じる能力」といったようなものを意味する言葉で、AGORA は場所の事ですね。きょうのお話は、それにとっても近いものを感じさせていただきました。お二人とも、常識を切る、というところで一家言ございまして、少し、私たちも、おっ!という、目からウロコというところもあったんですが、そのへんも含めまして、まず、高田さんから、感想をいただきたいと思います。



高田 公理 (佛教大学社会学部教授)

絹と植物色素の相性は非常にいいということですが、動物性の染料について少し教えてください。ヨーロッパでは、コチニールの赤や貝紫などの動物染料を使いますが、日本の絹には余り使わないんですか。



吉岡 幸雄 (染師 染色史家 「染司よしおか」 五代目当主)

日本にも実は、コチニールと同じラックという貝殻虫を使っておった歴史はございます。正倉院の中にラックそのものがございます。それは、日本でできるものはごくわずかですので、たくさんできる東南アジアとかブータンとかから輸入していただいたようです。貝紫の伝統は、日本には基本的にはないんですけどね。



高田

じゃあ、日本の紫には紫根を使うわけですか。

吉岡

そうですね。ただ、伊勢の海女さんが、貝のはらわたをとって、手ぬぐいを書いておるというようなものはあります。それから、佐賀県の遺跡、吉野ヶ里の方々は、貝紫があったとおっしゃっているんですが、私の見たところでは、あれは貝紫ではないですね。

高田

ありがとうございました。

で、つぎは片山さんが紹介された上田篤さんの話ですが、妙なことを言い出したもんですね。そう思うと同時に、そういった「縄文時代は持続可能性のある社会」といったファンタジーは、繰り返し出てくるように思います。

縄文といえば、火炎土器のようなものからの連想で「爆発する芸術家」の岡本太郎さんなんかの、激しい色と形を使ったアートを思い出すのですが、その際、端正な弥生時代の表現などと比較して、しばしば縄文時代のそれが称揚されたりするわけです。背景には多分、端正な弥生の文化と近代から現代にかけての端正な美学を生んだ、しかし他方で自然に対して非常に篡奪的な近代文明への批判があったような気がしないでもありません。しかし、だからといって縄文時代の生活様式や文化を、そのまま現代に適用できるわけなどあるはずはないと思います。

まあ、この問題は置いておくとして、人間の骨の歴史から、それぞれの時代の人間の生き方というか生活そのものが、どんな具合だったのかを明らかにされることには大きな意味があることを教えられました。やがては時代ごとの栄養状態なども明らかになるのでしょうが、大事なことだと思います。

ところで、こうしたこととも関係のありそうな「わびさび（侘び寂び）」の話ですね。いうまでもなく、それは日本文化の重要な側面ではあるのですが、これもまた、縄文的なものとの相克を捉え直す契機になるかもしれないな、などと考えました。で、その「詫び寂び」は、室町時代あたりの茶道と結びついて出てくるわけですね。

吉岡

ええ、まあ、その前に、西行とか、「源氏物語」で須磨に流された時の光源氏のくだりの中とかで「わびしい」という言葉が出てくるわけなんですけれども…。本当にこう、色彩で表したのは利休くらいからでしょうね。秀吉の金の茶室のようなものに抵抗するような、相対するような気持ちも利休にはあったとぼくは思います。だんだん形式化してくるといいうか、勉強してくるといいうか、自然に感じる侘しいとか寂しいではなくて、勉強して、わざとそう言う振りをするというようなことがあったんじゃないか。

高田

そういう意味で「詫び寂び」が千利休のお茶の世界に立ち上がってきたことは否定できません。しかし、それだけで茶の湯が成立したわけでもない。この点に関しまして、宣教師の通訳として日本にやってきたジョアン・ロドリゲスが『日本教会史』に非常に面白いことを書いています。

彼にとって茶の湯は一種の謎だったわけです。というのも、結構金持ちの大の大人が、狭い「にじり口」から、わざと質素にしつらえた狭い茶室に入って茶を嗜んでいる。なんで、こういうことが起こるのか。彼は非常に不思議に思うわけです。

で、繰り返し観察し、考えているうちに、その理由がわかってくる。つまり当時の日本は、百年ばかり続いた戦国の世の終わりに位置していました。そんな時代に見知らぬ人物と出会うのは、文字通り「命がけ」だったわけです。

ところが茶の湯の席なら、それが可能になる。にじり口は64センチ四方ですから、刀などの武器は身からはずさねばならない。それに、茶席では「お手前」というように、相手の目の前で茶を点てるので、毒を入れることもできない。その結果、茶の湯は見知らぬ人と人々とを平和的に出会う役割を果たしたのだと、ロドリゲスは言うんですね。これは何だか「詫び寂び」よりも説得的で、非常に面白い議論だという気がするのですが、いかがでしょうか。

もとより茶の湯は、非常に絢爛豪華な安土桃山の文化とせめぎあう「日本的な美学の粋」と位置づけられがちなのですが、それだけじゃない。他者が信じられなかった戦国の世の終わりごろに誕生した、新しい社交システムでもあったという点を忘れてはならないと思います。くわえて蛇足ながら、安土桃山の絢爛豪華な美しさと「詫び寂び」の関係には、もしかすると縄文と弥生の対比とがあてはめられるかもしれませんね。

吉岡

ちょっとしゃべっていいですか。あのう、世界中で国家権力が大きくなって、王国のようなものができると、必ず色のごく派手なものを求めて着るといふふうに考えたらいいと思います。それと、桃山時代なんかは、おっしゃるように、秀吉とか信長や上杉謙信の着てた装束が、今も残っておりますですね、特に、上杉家なんかには、とてもコンディションよく残っております、もうそれは、ものすごいカラフルで、これだけの色を使っているのか、と、また、模様もすごく立体的で驚かされます。あるいは、岡山の池田藩では、殿様が能楽者に買い与えた能衣装がありますが、これ、恋人以上にすごいものを与えているんですが、その色なんて、われわれは、勝てないです。桃山とか奈良時代の職人の方がずっとわれわれより上なんです。

高田

なるほど、そのあたりは、おっしゃるとおりなのでしょう。ただ江戸時代、社会的には

最上層に位置づけられた武士たちの衣装文化は、どちらかというと非常に抑制的というか、まあ質素だったわけでしょう？ それに対して、身分的には下層に位置づけられた町人たちは綺麗に派手に着飾っていたようですね。

これは、ファッションの推移に関して非常に面白い問題を投げかけているように思います。というのも、ヨーロッパのファッションは「上層から下層に」流れる。ココ・シャネルのデザインも、もとは上層の貴族の美学を継承しています。それに対して日本のファッションは「下層から上層に」伝わる傾向を露わに示します。たとえば、お嫁さんが身に着ける「打ち掛け」は、近世の花魁や太夫の衣装にほかならなかった。

最近でも、三宅一生や川久保玲など、日本のファッションデザイナーは、労働者やホモの衣装などを引用しながら、新しいハイ・ファッションを生み出しました。このあたり、非常に面白いなど、わたしは思っています。

吉岡

いや、それはヨーロッパも日本と同じです。確かに、江戸時代、富を得た町人は大名や公家が真似をしたがるような服装はしましたが、一般の庶民は、ほとんど藍一色。木綿は藍しか染まらないんです。大正年間になるまでは、一般庶民は、ほとんど色のないもの、ほぼ藍色のものを着ていたと覚えてもらったらいいと思います。これは、ラフカディオ・ハーンなんかは日本に来た時、日本人は、着てるものばかりか、暖簾まで藍ばかりで、よく働く。どこに行っても藍ばかりが植えてある、と書いているほどです。それで、今高田先生がおっしゃった、庶民ほど派手なものを着ているというのは賛成しがたい。

高田

なるほど、そういうことなのでしょうね。ファッションのリーダーになり得たのは、日本でも、よほど豊かな町人のごく一部だったのでしょうか。

山極

堀場さん、どうですか。偉くなると派手なものを着たくなるという話が出てましたが…。

堀場 雅夫（堀場製作所最高顧問）

うーん、と、知識がないもんで、まだお二人の話に入って行けてないんですが…。骨のほうで、片山先生は、油絵の具かき回したほど人は変わっているとおっしゃったんですけど、ぼくは、「なんやしょうもな、ちょっとも変わってへんな」と思ったんですけど…。7万年も経っているのに、背の高さが10センチぐらい違うとかね、体重がちょっと違うとか、頬骨が少し出ているとか、そんな程度で、人間ひとり一人だと変わっているかと思うが、違う動物



やったらあんなもんみんな「いっしょこた」で、どこが変わっているかわからへんことです。人類の歴史からいうたら、これ、旧石器時代といっても1%ぐらいの昔の話ですわね。きょうの話は、近代史の話。人類の歴史からいうたら、ついこないだみたいな感じで…。それにしても、これだけ世の中、周りの環境が変わっているのに、何で人間変わらへんのかとすごく思いました。

片山 一道（京都大学名誉教授）

確かに日本人の歴史は、人類の歴史を1年で例えると、大晦日か、12月の何日分でしかないんですね。そういう広い角度から見ると確かに変わらないんですが、基本的には人間の身体特徴というのは、時代性みたいなものを非常に強く反映するので、「身体史観」というものが出てくるわけです。縄文人というのは、たかだか1万年ぐらいの間なんで、人類史で見たら大したことないんですけど、日本人の歴史から見たらかなり大したものです。彼らはあまり変わらなかったんですね。とてもバタ臭い顔をしていました。縄文時代の間あまり変化はないですが、今のわれわれから見ると、ずいぶん違う人ですね、という気がするんです。これは、先ほど話したように、その時代の温暖化現象に関係した日本列島の生活環境に非常に関係した変化だと思います。



弥生時代の人々には、これも先ほども申し上げたように、ひとくくりに、こういうふうだったとはいえない多様性がある。いわゆる渡来人といわれる馬面で縄文人とは対照的な人もいれば、縄文人と同じような人もいますし、ちょっと出番が早すぎるんじゃないかと思える古墳時代の人のような人もいます。そうかと思えば、沖縄の方にいる人、アイヌの人のような人もいました。

それから古墳時代になると、今度は、階層化というか構造的なものができて、どんな墓に埋葬されているかで、ずいぶん違います。中世はそれが続き、江戸時代になると都市化して、都市の中では、貴族顔と呼ばれる長い顔、常民顔と呼ばれる寸詰まり顔が目立つようになり、多様性がどんどん膨らんでいきます。

吉岡

私の調べた範囲では、人間が最初に作った色は、まず赤なんです。朱か紅殻べんがらをまず発見しているんですね。それで、縄文時代に使っている色は、朱と紅殻と炭だけなんです。顔や体や石棺に赤を塗りますね。何か理由はあるんですか。

片山

よくわかりませんが、赤は非常に訴えるものがありショッキング、その存在感が大きいんじゃないですか。それと、赤い色は、結構、周りにあつたんじゃないですかねえ。

山極

顔料ですね。現代人の祖先がまだアフリカにいた時代から使っています。それで、ちょっとお二人にうかがいたいのですが、共感覚って言葉がありますね。色を見て何かが聞こえとか、何か物体が見えるような感覚なんですけど、人間が本性でもっている色に対する何か強い感情、例えば、赤だと火を連想して興奮するとか、緑だと逆に静まる気がするとか、何かそういう共通性というのが、片山さんだったら遺跡から、吉岡さんだったら色の配色や時代性から出てくるのでしょうか。あるいは、位の高い人はこういう色を好むというようなことが、遺跡や残されている文化の遺物から推定できるのでしょうか。

片山

いやあ私は、ようわからんのですけど…。考古学の人とかは、泉拓良先生がいらっしゃいますけど、弥生時代ってのは何となく洗練された色が似合い、明るいとかおっしゃっていて、それに対して、縄文時代のイメージは、どぎつい、原色が似合うなどというようなことを言っておられますが、私はようわかりません。

吉岡

赤は、太陽、血液、炎というものを象徴していると思いますね。色をどうして欲するかというと、自然との対話だと思います。暗闇から再び太陽の東に上がってくる瞬間の喜びとかは、それを象徴している。現代は、電気を使い過ぎているから、夜明けの瞬間に対する喜び、感動がすっかり欠けてきたと思うんですね。それで、赤は、炎もそうだし、人の生命…。そういう意味で、石棺を赤く塗っているのは死者再生を願っているのかなと思ったりするんですよね。

山極

動物と人間とで、色に関する感覚で多分一番違うのは、動物は色を識別できます。しかし、人間は色を生きるんですね。そこが違うところだと思うんです。色を作り出して以来、人間は色を生きるようになった。つまり、人間の感情の中に色っていうのは非常に入りこんで、色を作りだしながら、それを自分の表現にし、自分の好みをそれで表わそうとしてきた。そこが動物と一番大きく違う。

堀場

ゴリラも青とか赤とか紫がわかるんですか。

山極

基本的には色彩感覚は人間と同じです。



堀場

ということは、他の動物も逆にいうと、波長は0・4~0・8 ミクロンの間ぐらいしか見えないんですか。

山極

そうですね。霊長類、哺乳類は、基本的には色を識別する能力は低いですね。

高田

色盲でしょう。

山極

犬もほとんど色がわからない。牛もそうです。

高田

だから、闘牛の赤は、牛には関係ありません。

堀場

え、牛は赤で興奮してるんとかやうの。

高田

あれは、人間が興奮するための仕掛けなんです。牛は色盲ですから……。

堀場

これ、人間にしても、波長という意味の色からいったら、ほんのちよつとでしょう。紫外線から赤外線まで見えたら、人間ちゆうのは、もっと豊かになったんじゃないかなと思うんだけど…。

山極

でも、堀場さん、例えば、魚とね、爬虫類と鳥は4種類の視物質を持っていて、3種類しか持たない人間より、色についてはたくさん見えるはずですけど、だからといって、彼らが人間より豊かな色環境にいるとは思えません。色がたくさん見えれば豊かかどうか、色だけではないような気がしますね。

高田

ついでに言うておきますと、モンシロチョウですね。彼らが飛んでいるところを見て、

オスとメスを識別することは、ぼくら人間にはできません。ところが彼らは、紫外線が見えるので、オスカメスが容易に区別できる。紫外線で見ると、彼らのオスと雌はメスは、まるで異なった色に見えるようです。

山極

いや、さっき言いたかったのは、色を自分のものにして、自分の感情に色を合わせたというのが人間の特徴で、精神的に深まったんじゃないかということなんです。

堀場

クオリアの原点ですな。

吉岡

藤の木古墳だったと記憶してるんですが、人骨があつて心臓のあたりだけが朱で、ほかのところはみな紅殻だといってる人がいたんですが、このことは、正しいんでしょうか。

片山

たぶん違うんじゃないでしょうか。弥生時代から古墳時代ぐらいにかけて、水銀朱は、顔のあたりにまぶしていることが多いです。それが骨に付着する。紅殻は古墳そのものに塗ったりしている。

吉岡

水銀朱は貴重だから、そんな撒き方をしたという見方もあるようなんですが。

片山

大変個人的で主観的な話しかできませんが、縄文時代というのは結構色彩感覚の豊かな感受性の強い時代だったんですね。というのはやっぱり、自然環境にかなりべったりはまって生きていたわけですから、感受性が強くないとですね、なかなか、厳しく、おおらかに生きていくことは難しかったんじゃないか。それから、弥生時代になるとですね、よそ者がいっぱい入ってきて、それにともなってよそ者文化がいっぱい入ってきますので、いろんなものが多くなり過ぎて、ちょうど戦前から戦後にかけての頃と同じように、感受性が鈍っているんですね。これは、全く主観的な話です。

山極

会場のみなさんの意見をお聞きする前に、スピーカーのお二人に、ちょっと私の方から最後におうかがいします。日本人として、時代によって、縄文から今日まで、好む色は変わってきたのでしょうか、あるいは、よく似たものなののでしょうか。

片山

大変個人的で主観的な話しかできませんが、縄文時代というのは結構色彩感覚の豊かな感受性の強い時代だったんですね。というのはやっぱり、自然環境にかなりべったりはまって生きてるわけですから、感受性が強くないとです、なかなか、厳しく、おおらかに生きていくことは難しかったんじゃないか。それから、弥生時代になるとですね、よそ者がいっぱい入ってきて、それともなってよそ者文化がいっぱい入ってきますので、いろんなものが多い過ぎて、ちょうど戦前から戦後の時と同じように、感受性が鈍っているんですね。これは、全く主観的な話です。



吉岡

私からいうと、色が作れるようになってくると、まず青、赤、黄という三原色を作ることと、白、黒ですね。中国の五行思想というのがすごく、どこの国もこの5色がベーシックな色になっていると思うんです。ただ、私の調べたことでは、前漢あたりから、紫だけが五行にプラスして出てきまして、紫が高貴な色、憧れの色であるという文化が蔓延してくると思っております。日本では、藤原氏の摂政関白のころあたりから、源氏物語とか見えていますと、紫がずっとトップでいるというか、憧れの色であることが何となく読み取れるのです。そういうことしかお答えしにくいですね。

山極

なぜ紫なのか、その理由はなんでしょう。

吉岡

これは、ヨーロッパもそうなんですね。貝紫の話がありました、帝王紫ですね。人類の2千5百年ぐらい前からこっちは、大体、紫が高貴な色であるということは否めないことです。

高田

面白い話ですね。そこで思い出すのは、色の流行の時間的な長さを比較した流行色研究の論考のひとつです。まあ、かなり怪しい話だと思うのですが、黒や赤などの流行期間は非常に長いのにに対して、紫色の流行期間は非常に短いというんですね。何故かという、赤から紫までの色を並べると、最も波長の短いのは紫でしょ？ で、いろんな色のエネルギー水準を比較すると、紫が最も高い。だから、紫色は視神経を強く繁くすることで余り

長期間にわたって眺め続けるのがむづかしい。結果、その流行期間が短くなる、というのが、うーん、どうも眉唾的だというほかなさそうな話ですね。

吉岡

それと、もうひとつ、先ほど三宅一生とか話があったんですが、私は、これ、化学的な色が蔓延しすぎ、ほとんどの人が嫌がっているところをついていったということではないかと思います。それから、今のデザイナーは色を使えない、使う能力のない人が多いと私は思っております。街の色もそうです。看板や建築物ですね。色が自由に使えるようになればなるほどおかしくなっていると私は思います。

山極

フロアからいかがでしょう。

寶 馨（京都大学防災研究所教授）

骨についてですが、同じ現代に生きているわれわれのことなんですが、友だちと尾骨を比べたことがあるんです。すると、尾骨の大きさに差があるというか、友だちの方が尾骨が出ていて、お前は古代人に近くおれは進化しているということになったんですが、これ根拠はありますか。それと白人、黒人で違いがあるんでしょうか。

片山

考えたことないですけど、単なる個人差ということではないでしょうか。

山極

類人猿の方が、尾椎が少ないっていう話ですね。

片山

尾椎というより腰椎です。腰椎が少ないんですね。ゴリラは四つしかない。

山極

すると、むしろ大きい方が進化しているということですか。大きさが違い、個人差があって、シッポのように出ている人もいるということを知ったことがありますか…。

寶

人種によって違うということもないのですか。

片山

それはなかなか難しいですが、多分、グループによって大きさが違うというのは、ないと思いますね。そういうデータは私が知っている限りではないと思いますし、聞いたことないですね。厳密に調べたものではないデータはあるようですが、ちょっとわかりません。

津田 雅也（立命館大学特別招聘教授）

色彩のことでしょうかがいたいのですが、金とか銀は、色彩も含めてどういう位置づけになったんでしょう。

吉岡

ちょっと金とか銀は詳しくないのですが、金とか銀を、衣装の方に持ってくるには、非常に薄くしなければならぬ。これは、中国で紙が発明されますと、紙では喜んで薄くしました。ヨーロッパでは、革には喜んで薄くしますがあまり薄くならない。金属っぽいものをくるくる巻いて糸になっているんですね。アジアでは、紙には喜んで極めて薄くたたき伸ばし、さらに紙に裏打ちしカットするので、ますます薄い金銀糸ができる。だから、金襴のように全部金を織り込んでいっても金属性を感じないんです。この点で、中国、日本、韓国は金を使う染織においては優れた国で、ヨーロッパとは差が出ています。

津田

金とか銀を色に取り入れようと試みられたことはありますか。

吉岡

本金箔とか本金泥を使うということ以外できないです。金や銀を染めることは不可能ですから。金属は染められないので加工するしかないです。

山極

はい、どうも、ありがとうございました。では、この後、ワールドカフェに移りたいと思います。「2030年の未来を考える」というのが今年のクオリアのテーマです。それで、その「お題」ですが、片山さんの身体史観から、どういう日本人の身体というものが考えられるかをベースにしながら、吉岡さんがお話になった色ですね、どういう色を配色していくべきなのか。色を使ってどういうことがわれわれの生活の中で実現可能なのか、というようなことをお話しいただければと思います。お話の中に、今、化学的な材料を使って豊富な色を使うことができるようになっていますが、このためにかえて色の使い方が下手になっているというご指摘もありました。確かに、街を眺めてみると、統一性のない色があふれています。これをどうしていったら、私たちは豊かになっていけるのか。この点についても考えていただき、討論をお願いいたします。

第3回クオリア AGORA 3013 「古人骨・古代の色から見る、日本人とは何か!？」

□第1グループ報告者 池本 貴志（旭化成イーマテリアーズ電池材料事業部）

「骨から、色から」というところでいろいろ話をしましたが、どちらかというところを重点的に論議しました。色の持つ意味、人間がそれによって何を感じるか、そしてそれはどこからもたらされているのかと、話し合ったんですが、最後、2030年、日本をどうするかとなった時、途中でも出ていましたが、日本は「わびさびの文化」ではない、^{いろどり}彩の国だと。それを打ち出していこうということになりました。

それでは京都の色は何色となった時、京都の人たちは紫とか緑とかいうんですが、私は、栃木県出身なんですけど、京都のイメージは茶色なんです。京都以外の方が思っているイメージは茶色とか朱色で…。日本人はこういうところに制約をされているのではないかな。これから大事なものは、まだまだ暗黙知化されている色、色合い等世界に売り出している色やデザインがあるのではないかな。例えば歌舞伎で使っている色合いとかは非常に素晴らしいものです。これらを世界に打ち出していくことが、今後の日本にとって大事では。わびさびだけではありませんよと、いうわけです。

□第2グループ 西田 光生（東洋紡化成品開発研究所）

吉岡さんのテーブルだったので、色一色です。昔は人も少なかったんで、色も自然のものを使ってできたのだけど、70億人もいる今、自然のものだけ使っていたら大変なことになり、それだけで自然破壊につながってしまう。どうしても、化学合成の染料を使うしかなく、自然の染料の色合いは高価に、貴重になっていくしかない。でも、絶やすことなく受け継いでいかないといけないと思うので、吉岡さんに伝道師になってもらって世界を回っていただかなければならない、と。それで、ちょっと最後に「色」と「彩」の違いについて、吉岡さんに話していただきます。

吉岡 幸雄（染師 染織家 「染司よしおか」五代目当主）

私、講演の時はいつもこの話をしますが、白川静先生の説をご紹介します。「色」は、いわゆる「色男」の色なんです。つまり、男女が絡み合っている象形文字から来ているそうです。「彩」は、木の実があつたり、花があつたりしているから、染めたり、色どりがあつたりすることを観賞しているということなんです。すぐ色というと、「色」を使いますが、これから皆さん、使い分けをおろそかにされないようにしてください。みなさんは「色」、私は「彩」の方です。

□第3グループ報告者 市川 聡（日産自動車EV技術開発本部）

一応バランスよく、骨と色の話をさせていただきました。キーワードは、機能と美学。最終的には『多様化していく』ということに落ち着きましたが、いろんな意見を交わしました。色についてはですね、サラリーマンの黒色から始まりまして、色ってどういう意味があるのかとか、人類が使った色はどの色から始まったのかということをして話して、最後の方は病院の話になりました。これ、わかりやすいと思うんですが、病院が白やブルーを基調にしているのは、血がわかりやすいからなんですね。つまり、何でも目的に応じて色が使われている。それで、京都の色なんですけど、一時は、広告の関係でいろんな色が使われ、いかなものかということになり、規制が入って、最近、京の街が京都らしい色になってきた。何色が京都の色？ということまでは出なかったですが、京都という街を表す色に収れんしてきたと。ただ、このように目的に応じて色は使われ、使い分けされていくが、色そのものは増えていくので、今後を考えると、どうしても多様化していきだろう、ということに結論が達しました。

骨の方ですが、今後の30年という期間が、骨格が変わるのに十分なのかどうかを話しました。ドラスティックに変わる時は、30年あれば十分だという話があり、では、日本人がこれから30年でどうなるかという、身体的にはもうすでに変わっている。今後の30年で変わるの顎。悪い方に変るといことだそうで、これが一番心配で、なんとかしないといけない課題です。顎は、使わないとだめになるし、使い過ぎてもいけないが、今は『使わなさ過ぎる』ということでした。身長については、昔に比べると8等身、9等身の人が増えている。これはもう変化した後なので、今後、10等身、11等身になっていくことはないようです。何等身については、どれが人類にとって一番いいとか悪いとかの問題ではないようで、『どんな体型がいいか悪いか』、これはもう美学の問題だと。ただ、着物は似合わなくなるので、京都の人は6等身ぐらいがいいねと…。

□第4グループ報告者 山本 勝晴（浄土宗西山深草派 僧侶）

うちのテーブルは、色を使って何ができるかで、切り込んでいきました。徳島というところは、藍の産地で、日本中で藍が使われていたために、一時は大都市に匹敵するような人口があったんです。が、インディゴブルーが輸入されるようになって、衰退し、今のようになったんですね。これ、すべてが高きから低きに流れるということで仕方ないところもありますが、化学染料は200、300年ぐらいで色あせてしまう。だからここで、もう少し化学染料と自然染料の違いをはっきりさせた方がいいんじゃないかという話が出ました。つまり、自然の染料は素晴らしいということです。それで、なぜ、ヨーロッパは自然染料を使っていないのか、馬鹿じゃないかということなんですけど、イタリアのミラノあたりのデザイナーに、日本の色が素晴らしいということを説得して、色のブランド力を高める。それで、需要が増えていくんですが、そうすると材料が足りなくなる。そこで、熱帯地方の麻薬を作っている人たちに、麻薬より染料植物の方がいいよと栽培してもらおう。これで、色を通じて社会貢献もできる世界を巻き込んだ動きが作れるというわけです。骨について

は高田先生よろしくお願いします。

高田 公理（佛教大学社会学部教授）

健康や病気に対応するために、今や世界中で人々は「遺伝子、遺伝子……」と言いつつっているんですね。まあ、それはいいとして、きょうの片山さんの話によると、ホモ・サピエンスの遺伝子といたしますか、ゲノムそのものは、20 万年前のクロマニヨン人以来、ほとんど変わっていないわけでしょう？ にもかかわらず、生活様式が変化すれば、骨の形が変わる。言い換えると、人間の身体の高田先生の形は、いわば生活様式の表現形だということ、そういう話として理解したのですが、片山先生、それでいいんですね。

とすれば、自分の体や健康については、ひたすら医者に相談するのではなく、それぞれの方が、常に「わが体が喜んでいてるかどうか」を感じ、考えながら暮らしていくという生活様式を、われわれ自身を取り返すことが必要なのではないのだろうかと考えてみました。つまり、すべてを遺伝子の問題、さらに言えば客観的な医療データに基づいて一喜一憂するのではなくて、わが体が喜んでいてるんだから、骨もちゃんとしているにちがいないと、そういう自信を取り戻すことが大切なんだと思わされた次第です。

これを色の問題にあてはめるとね、「色は男と女」とおっしゃったんですが、これ、なかなかいいですね。というのも、色を西洋近代の視点で捉え直すと、それは「周波数の問題」にほかならない、ということになる。

でも、われわれ日本人は、そう考えません。周波数の問題だという捉え方に、さまざまなノイズ、いい意味でのノイズを加えて、あえて「藍の色とインディゴの色は違うのだ」と考え、そう言ってみる。そういうことが大事なのではないでしょうか。

というのも、今の世の中、ノイズをできるだけ少なくして、たとえば生命現象に関しては、すべてを遺伝子とゲノムで理解し、問題を解決しようとしています。しかし、実際にはどうも、それだけでは問題の解決には、なりそうにありません。というのも、私たちの普段の暮らし、人生や人間の社会にあっては、さまざまなノイズが、非常に大きな意味を持っているからです。

こういう具合に考えると、2030 年は、もう一度、多様なノイズを巧みに取り込む「ジャポニズムの時代」がやってくるのかもしれない。そんなことを考えていた次第です。

クオリア AGORA 事務局

大変活発な発表ありがとうございました。では、片山さん、吉岡さん一言、感想をお願いします。

片山 一道（京都大学名誉教授）

ぼくは、大変気後れする人間で、カルチャーショックを受けております。大変うれしい、

楽しいカルチャーショックを受けています。ありがとうございました。

吉岡

やあ、もうきょうはびっくりばかりしています。ありがとうございます。また、よろしくお願いします。

クオリア AGORA 事務局

どうもありがとうございました。最初に、山極さんが「きょうは、まさにクオリアだ」とおっしゃっていましたが、そうになりましたでしょうか。

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）

はい、なりましたよ。まさにきょうは、感性の話であって、日本人が人間として、日本の文化の中で磨き上げてきた色に対する感性、さらに身体観というものがこれからどう生かされていくかということの非常に大きな前提を討論できたと思います。最初に、大発言がありましたね。「わびさびの文化だけじゃない」。すばらしい豊かな色彩があるのも日本の特徴だってことを、もっと世間に対して申してもいいだろう、ということが確信を持って受け取れたんじゃないか。そんな気がして、とても楽しかったです。

（編集 辻 恒人）